

令和8年度病害虫発生予報 第1号（5月予報）

令和8年5月1日付

奈良県病害虫防除所

今月の発生に注意を要する病害虫

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
水稲	イネクビホソハムシ（イネドロオイムシ）	やや早い	平年並
	スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）	平年並	やや多い
小麦	赤かび病	平年並	やや多い
カキ	落葉病	やや早い	やや少ない
	炭疽病	やや早い	やや多い
	灰色かび病	やや早い	やや少ない
	フジコナカイガラムシ	やや早い	やや少ない
	チャノキイロアザミウマ	やや早い	平年並
ナシ	黒斑病	やや早い	少ない
	黒星病	やや早い	少ない
果樹共通	果樹カメムシ類	早い	多い
ネギ	ネギアザミウマ	平年並	やや多い
キク	ナミハダニ黄緑型	平年並	やや多い
野菜・花き共通 （キク）	アブラムシ類	平年並	多い
野菜・花き共通 （半促成トマト）	コナジラミ類	平年並	やや多い

○気象予報（近畿地方の1ヶ月予報：4/25～5/24）

気温：平年より高い確率が50% 降水量：平年より多い確率が40%

日照時間：平年並、少ない確率がともに40%

○今月の農薬適正使用のポイント

1. 農薬散布時の注意事項

- ①農薬散布は、極端な高温、低温時を避け、散布後に葉が濡れた状態が長時間続かないように、散布時間帯や天候、換気等に配慮しましょう。
- ②散布後に葉が乾いてから、残った薬液等による重複散布を行わないようにしましょう。薬害、農薬残留基準値超過の恐れがあります。

2. ハウス等で水稲や野菜を育苗するとき

後作への農薬残留を防止するために、次の点を徹底してください。

- ①薬剤処理時やかん水時に育苗箱や育苗ポット（鉢）等から漏れ出た農薬が土壤に浸透しないよう、処理前にハウス全面にビニルシートを敷くなどして土壤と隔離します。
- ②薬剤の処理時には、薬剤が地面に飛散しないよう丁寧に処理します。

3. 水稲の育苗箱施用

水稲の育苗箱施用を行う場合は、十分な薬効を確保するため、以下の点に注意します。

- ①ラベルに書かれた規定の処理量を遵守します。
- ②移植直前に処理する場合は、処理後に軽く散水し、稲体に有効成分を吸収させてから移植します。
- ③移植後はかけ流しを控え、1週間程度止水します。

4. 被覆の必要な土壤くん蒸剤を使用するとき

- ①クロルピクリンなど、被覆の必要な土壤くん蒸剤を使用するときは、処理後の覆土と被覆を直ちに行い、周囲に漏れ出さないよう十分に注意してください。
- ②住宅地などの周辺で使用する場合は、人畜に被害が生じないように、周辺住民への説明や事前周知を必ず行うなど、被害防止対策を徹底してください。

5. 農薬の適用作物名

農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。以下のような作物間ではいずれも農薬登録内容が異なりますので、特に注意して下さい。

○トマトとミニトマト

○ピーマンとシシトウ

○実えんどう（未成熟な種子を収穫するもの）とさやえんどう（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）とえんどうまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○さやいんげん（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）といんげんまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○ネギとワケギ

その他、判断に迷った場合には、病害虫防除所や各農林（農業）振興事務所へお尋ねください。

※農薬に関する情報は、令和8年4月28日現在の登録内容に基づいて記載しています。

I. 普通作物

1. 水 稲

(1) 苗立枯病、苗立枯細菌病、もみ枯細菌病（平坦地域）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査時点では発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 病原菌による汚染を防ぐため、種籾や育苗培土に土壌や小さな有機物が混入しないよう注意します。また、浸種後の種籾は倉庫のすみなどに一時保管しないようにし、育苗箱は昨年の根などが付着していないきれいに洗浄されたものを使用します。
- 2) 種子消毒前には塩水選を必ず行います。テクリードCフロアブル、モミガードC水和剤等の薬剤または、温湯による種子消毒を行い、苗立枯細菌病またはもみ枯細菌病による幼苗腐敗症の発生が予想される場合は、カスミン液剤等の覆土前処理を行います。ピシウム菌、フザリウム菌による苗立枯病には、播種時又は発芽後にタチガレエースM液剤を処理します。
- 3) 育苗用土は pH5 前後の排水のよいものを使用します。厚播きは発病を助長しますので、播種量は湿籾で 120 g 程度の薄播きとします。
- 4) 再汚染防止のため、浸種の水は水道水又は地下水を使用します。
- 5) 出芽処理は発病を助長しますので、32℃以上にならないように注意し、処理期間は2日程度とします。
- 6) 発芽後は、極端な高温や低温、過湿に注意し、日中の換気を行います。特に保温性の被覆資材によるトンネル育苗では、日中の高温に注意します。
- 7) 発病した育苗箱等は直ちに処分し、その後の育苗は、排水および通気性を確保して、高温管理を避けます。発根が悪い場合には灌水を控えめにします。

(2) いもち病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査時点では発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 塩水選と種子消毒は必ず行います。
- 2) 厚播きは発病を助長します。播種量は湿籾で 120g 程度の薄播きとします。
- 3) 施設及びトンネル内は高温・多湿になり、発病しやすい条件になり、特に育苗期後半には苗が混み合って蒸れやすく、発病が助長されます。施設やトンネル育苗では日中高温にならないよう、換気に努めます。

(3) ばか苗病

予報内容 発生盛期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 近年は本病の発生は減少傾向にあり、種子伝染のリスクも低下していると考えられます。

防除上の注意事項

- 1) 発生歴のあるほ場からの自家採種を控え、種子更新を行います。
- 2) 作業場に残った感染した籾殻や稲わら、米ぬかなどが伝染源になりますので、作業場や育苗施設等の清掃を徹底します。浸種時の伝染源の混入に注意します。
- 3) 種子消毒を徹底します。特に、温湯消毒を行う場合は水温や浸漬時間に注意し、浸漬中は水温に温度むらが生じないように留意します。

(4) イネドロオウムシ (イネクビホソハムシ)

予報内容 発生盛期：やや早い 発生量：平年並 (中山間)

予報の根拠

- 1) 5月の気温は平年より高いと予想されていますので、越冬世代成虫の発生時期はやや早いと予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 5月下旬～6月上旬に本田の成虫密度が株当たり 0.5 頭以上の場合は、トレボン粒剤等で追加防除を行います。

(5) イネミズゾウムシ

予報内容 発生盛期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4月20日時点では、予察灯 (奈良県桜井市) への飛来を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 苗代で越冬成虫の侵入が多い時は、トレボン乳剤等の防除が有効です。
- 2) 中山間では、田植期の箱施用と田植後 20 日頃の本田施用との体系防除を行います。成虫密度が株当たり平均 0.5 頭以下の場合は、本田防除を省略できます。
- 3) 本田防除は、水田の周辺 2～3 m 程度の幅で額縁状の防除だけでも有効です。

(6) トビイロウンカ

予報内容 飛来時期と量：4/20 時点で未飛来

予報の根拠

- 1) 4月20日時点では、予察灯 (奈良県桜井市) への飛来を認めていません。
- 2) 5月上旬から飛来状況を病害虫防除所ホームページに随時掲載しますのでご覧下さい。

防除上の注意事項

- 1) トビイロウンカ対策に最も効果的なのは、効果の高い箱粒剤による予防です。箱粒剤は、有効成分にトリフルメゾピリムを含む剤 (フルスロットル、スクラム、ハコガード、ゼクサロンなど) か、オキサゾスルフィルを含む剤 (アレス、稲名人など) か、フルピリミン剤 (リディアなど) を使用します。これらと同じ有効成分を含む様々な商品名の箱粒剤がありますので、農薬販売店等に相談し、他の病害虫との同時防除も考慮して選びます。
- 2) 多飛来があった場合は防除情報を発出しますので、今後の予察情報に注意します。

(7) スクミリングガイ (ジャンボタニシ)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 冬期 (令和 7 年 12 月から令和 8 年 2 月) の平均気温は 6.5℃とやや高く推移したので、越冬量はやや多いと予想されます。

防除上の注意事項

- 1) スクミリングガイは稚苗の柔らかい時期を好んで食害します。4 葉期を過ぎると食害リスクは減少しますので、田植後 2～3 週間の対策が重要です。ただし、2.5cm 以上の貝は 4 葉期でも食べるので、その後も注意が必要です。
- 2) 稚苗移植を避け、中・成苗で移植します。
- 3) 苗が食べられるのは水中だけですので、田植後 2～3 週間は水深 4 cm 以下の浅水管

理にします。

- 4) スクミノンなどの薬剤処理を田植え直後に行います。

2. 小麦

(1) 赤かび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では発生を認めていません。
- 2) 4月下旬から5月上旬にかけて降雨が続くと予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は開花始め～開花期です。適期防除を行うため、出穂や開花状況をよく観察します。また、1回目散布の7～10日後に2回目の防除を実施します。
- 2) 乳熟期以降に発生が認められたほ場では、早急に追加防除を行います。
- 3) 被害粒の混入を防ぐため発生ほ場では、収穫作業を別に行います。
- 4) 一昨年は県内全域で発生が多く、引き続き注意が必要です。赤かび病菌が産生するかび毒（デオキシニバレノール）が基準値（1.0mg/kg）を超えると、食品衛生法により流通ができなくなります。

II. 果樹・チャ

1. カキ

(1) 落葉病（円星・角斑）

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 昨年10月下旬の調査では、発病葉率は3.6%と平年に比べてやや低かったです。
- 2) 5月の気温は高いと予想されており、発生時期はやや早いと見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 子のう胞子の飛散が5月下旬以降に多くなるので、適切な予防散布を行います。

(2) 炭疽病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 3月下旬の甘柿園を対象とした調査では、一部の園地で罹病枝が多く、罹病枝率1.9%と平年に比べてやや高くなっていました。
- 2) 5月の気温は高いと予想されており、発生時期はやや早いと見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 5月下旬以降、新梢での発病が見られた場合は、他の新梢や果実への伝染源となりますので必ず切除します。
- 2) 甘柿では4月下旬～5月上旬にデランフロアブルを、5月中下旬（ミツバチ導入直前）にミギワ20フロアブルをいずれも単用で散布します。渋柿でうめ隣接園では開花直前にデランフロアブルを、満開期にトレノックスフロアブルを散布します。渋柿で他の作物が隣接しない園地では、5月上旬にデランフロアブルを散布します。

(3) 灰色かび病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 昨年6月下旬の調査では、被害果率は2.6%と平年に比べてやや低かったです。
- 2) 4月下旬の調査では発病葉率は0.3%でした。
- 3) 5月の気温は高いと予想されており、発生時期はやや早いと見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 発生の多い園地では5月中下旬のミツバチ導入直前にミギワ20フロアブルを散布します。
- 2) 葉先や開花期のがくに発病すると褐変します。そして、開花期の花弁に感染すると、落弁後の幼果にかさぶた状の黒い病斑が残り、果実の商品性に影響します。葉先やがくへの発病を観察し、必要に応じて薬剤散布を行います。

(4) フジコナカイガラムシ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 4月下旬の巡回調査では、寄生母枝率は0.1%と平年に比べてやや低くなっていました。
- 2) 5月の気温は高いと予想されており、発生時期はやや早いと見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 新梢の生長に伴い、越冬幼虫は新梢基部から蕾へ移動していきます。
- 2) カイガラムシの発育ステージが進むにつれて薬剤が効きにくくなりますので、4月の防除が未実施の場合は速やかに防除を実施します。

(5) チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 昨年8月下旬の巡回調査では被害果率は6.3%と平年並でした。園地の内外で越冬した個体の数も平年並みであると考えられます。
- 2) 5月の気温は高いと予想されており、発生時期はやや早いと見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 花の中に侵入して加害が始まります。そのため、うめに隣接する渋柿園では開花直前にバリアード顆粒水和剤を、満開期にモスピラン顆粒水溶剤を散布します。また、他作物が隣接しない渋柿園では、5月上旬までにジェイエース水溶剤またはオルトラン水和剤を散布します。

2. ナシ

(1) 黒斑病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：少ない

予報の根拠

- 1) 4月下旬の巡回調査では、果そう部の発病が目立った園は見られませんでした。昨年の8月下旬の巡回調査では被害果率は1.3%と平年に比べて低かったです。
- 2) 5月の気温は高いと予想されており、発生時期はやや早いと見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 摘果から小袋掛けまでの時期が重点防除期です。同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション散布します。
- 2) 小袋掛け直前の薬剤散布は丁寧に十分量を散布し、袋内に病原菌を持ち込まないようにします。
- 3) 散布後はできるだけ早く袋かけを行います。散布から袋かけまで5日以上間隔があく場合や降雨があった場合は、散布をやり直してから袋かけを行います。

(2) 黒星病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：少ない

予報の根拠

- 1) 4月下旬の巡回調査では、果そう部の発病が目立った園は見られませんでした。昨年の8月下旬の巡回調査では被害果率は1.5%と平年に比べて低かったです。
- 2) 5月の気温は高いと予想されており、発生時期はやや早いと見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 摘果作業等で果梗や葉柄に黒いスス状の病斑を認めたら、必ず取り除きます。
- 2) 開花後約3週間は幼果の感受性が高く、重点防除期です。同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション散布します。

3. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類

予報内容 発生時期：早い 発生量：多い

予報の根拠

- 1) 県内18カ所におけるチャバネアオカメムシの越冬密度調査の結果、越冬個体の密度は

10.6 頭/落葉 50L と高くなっています。

防除上の注意事項

- 1) チャバネアオカメムシ越冬成虫の前期発生（5～8月前半）は多いと予測されます。今後の予察情報に注意し、十分な警戒が必要です。また、ツヤアオカメムシが近年増加傾向にありますので、今後の予察情報にご注意ください。
- 2) ウメ、モモ、ナシが早期から被害を受けやすく、また、カキ園地に飛来して幼果を吸汁されると落果する可能性があります。ほ場をよく見回り、虫や被害を確認した場合は直ちに防除します。ただし、カメムシがいない時の予防散布は、効果が期待できないうえ、天敵への影響が懸念されるので控えます。

4. チャ

(1) チャノホソガ

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：やや少ない

予報の根拠

- 1) 大和茶研究所（奈良市矢田原町）内のフェロモントラップへの誘殺は、4月第1～2半旬が越冬世代成虫発生のピークとなっています。発生時期は平年並、発生量は過去5カ年平均の0.5倍となっています。

防除上の注意事項

- 1) 摘採近くになって巻葉が目立ち始めた場合、早めに摘採します。
- 2) 摘採が遅い茶園では幼虫の発生状況に注意が必要です。

(2) チャノコカクモンハマキ・チャハマキ

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 大和茶研究所（奈良市矢田原町）内のフェロモントラップへの誘殺は、4月第1半旬から開始されています。越冬世代成虫の発生ピークは4月中旬～下旬と予想されます。発生量は平年並と予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 前年度秋に多発した茶園では今後の発生状況に注意が必要です。

(3) カンザワハダニ

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 4月中旬の調査での発生圃場率は62.5%でした。
- 2) 寄生葉率は1.75%でした。

防除上の注意事項

- 1) 発生密度に差があるので、茶園の発生状況に注意が必要です。
- 2) 葉裏に生息するので、葉裏まで薬剤がかかるよう丁寧に散布します。
- 3) 被覆園では被覆前に丁寧に防除をする必要があります。
- 4) 一番茶摘採前の防除は摘採前使用日数を確認したうえで散布します。
- 5) 薬剤感受性が低下する（薬剤の効きが悪くなる）ので、年間を通じて同一系統剤（ラベルに記載されているIRAC番号が同じ薬剤）の連用は避けます。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. イチゴ

(1) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では発生を認めていません。
- 2) 5月以降の気象条件はうどんこ病の発生に好適な条件となりますので注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 罹病性品種（古都華、アスカルビー、さがほのか等）の育苗ほ場では、葉裏の白色菌そうやスプーン状の巻葉に注意し、5月から梅雨明けまでの予防に努めます。特に雨よけ育苗では発生が拡大しやすいので注意します。

- 2) 本ほから育苗ほ場への伝染を防ぐため、収穫の終わった本ほは、害虫対策を兼ねて 10 日間以上ハウスを締め切って株を枯らします。
- 3) 発生を認めた育苗ほ場では、薬剤による体系防除を必ず継続して行い、確実に防除します。

(2) アザミウマ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4 月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率 30%、花あたり虫数 0.14 頭でした。
- 2) 一部のほ場では多発が認められます。

防除上の注意事項

- 1) 花房に集中して寄生しているので、白い紙などの上で花を叩く事によって発生を確認出来ます。10 花当たり 1 頭以上の場合は防除します。
- 2) 栽培の終盤にあたりますので、各種天敵製剤の使用の有無に関わらずダブルシューター S E またはグレーシア乳剤で防除を行います。いずれの薬剤もハダニ類との同時防除を狙い、株全体に十分量を散布します。

(3) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 4 月中下旬の調査では、発生ほ場率 20%、発生株率 1.6%でした。

防除上の注意事項

- 1) 葉が込み合っていると葉裏への薬液の均一な付着が難しくなりますので、殺ダニ剤の散布は、株の整理後に行います。この際、摘除した葉や株は、ほ場内やその周辺に放置するとハダニ等の発生源になります。袋に密封して蒸し込むなど、処分を徹底します。
- 2) 各種殺ダニ剤に感受性の低下した個体群が増えるので、同一殺ダニ剤の連用は避けまます。効果に疑問がある場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。

2. トマト（半促成）

(1) 灰色かび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4 月中下旬の巡回調査では発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 被害果は早めに摘除して施設外に持ち出し、土中などに埋没処分します。
- 2) 薬剤のみによる防除は困難です。発生ほ場では灌水は控えめとし、日中の換気によって施設内湿度の低下に努めます。
- 3) QoI 剤、SDHI 剤、MBC 剤に対する耐性菌が発生しています。耐性菌の発生が少ないロブラル水和剤、セイビアーフロアブル 20、フルピカフロアブル等を使用します。

(2) 葉かび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4 月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) Cf-9 抵抗性を打破する菌株が発生しています。Cf-9 抵抗性品種を栽培する場合も本病の発生に注意します。
- 2) 多湿条件下で発生しやすいので、株の密植を避け、換気を行うなど湿度を下げるように管理します。
- 3) 葉裏の病斑上に胞子が形成されると急速に拡大し防除が困難になるため、発病前にダコニール 1000 で予防散布に努めます。薬剤が葉の裏面にも十分にかかるように丁寧な散布を心がけます。

- 4) 一部地域では QoI 剤や SDHI 剤の耐性菌が確認されています。同一系統薬剤の連用を避けるとともに、薬剤の効果に疑問を感じた場合は各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

(3) アザミウマ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では、白ぶくれ症の発生は認めていません。

防除上の注意事項

- 1) トマト果実の白ぶくれ症状は5月以降に増加します。本症状はアザミウマ類による開花期の加害によって発生します。果実被害が増えてからでは手遅れですので、早めに防除を行います。

3. ホウレンソウ

(1) ベと病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率20%、発病株率0.4%でした。
- 2) 今後、天候不順が続くと発生に注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は伝染源となるので、見つけ次第、除去処分するとともに、収穫残さはハウス周辺には放置せず、地中深くに埋没又は袋詰めし、密封して処分します。
- 2) 平均気温8~18℃で、曇雨天が続いたり、ハウスを閉め切るなどの多湿条件が続くと多発するので、温度、かん水、通風など栽培管理に注意します。
- 3) 前作で、ベと病が発生したほ場では、は種前のユニフォーム粒剤の全面土壌混和处理やランマンフロアブル等の散布剤による予防を行います。
- 4) レース1~10抵抗性品種でも発病が確認されています。発病しやすい天候不順時には、薬剤による予防散布を行います。

(2) ホウレンソウケナガコナダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率40%、発生株率4.0%でした。
- 2) 5月中は発生に適した条件ですので、防除を怠ると多発する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 前作の残さや間引き株をほ場に放置したり、土壌にすき込んだりすると、コナダニの増殖源となりますので、ハウスから持ち出して離れたところで処分します。
- 2) 本葉2葉期頃と4~6葉期頃にグレーシア乳剤を散布します。

4. ネギ

(1) ベと病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 今後、天候不順が続くと発病に注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は伝染源となるので、見つけ次第、除去処分するとともに、発病株の残さはほ場外に持ち出すか、埋没又は袋詰め等で密封して処分します。
- 2) 多湿条件が続くと多発するので、ほ場の排水に注意します。
- 3) 前作で多発したほ場では、ジマンダイセン水和剤、リドミルゴールドMZやベトファイター顆粒水和剤等による予防散布を行います。

(2) さび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 5月中は発生に適した条件ですので注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 発病株の残さはほ場外に持ち出すか、埋没又は袋詰め等で密封して処分します。
- 2) 肥料切れで草勢が衰えると発病しやすくなるため、適切な施肥を行います。
- 3) 予防散布を基本とし、アミスター20フロアブル、ジマンダイセン水和剤で防除を行います。

(3) ネギハモグリバエ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 5月の気温が高いと予想されていますので、今後の増加に注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCを発生初期に株元灌注処理します。また定植ネギの場合は、定植前に育苗トレイ等に灌注処理を行います。
- 2) 灌注処理後も発生によく注意して、再発生が見られた場合はリーフガード顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくびかななどの展着剤を加用します。
- 3) ハモグリバエが多発した残さは次の発生源になりますので、できるだけほ場の外に持ち出して処分します。また、多発ほ場の株元土中にはハモグリバエの蛹が高密度で残存しますので、次作の前にバスアミド微粒剤などを処理します。

(4) ネギアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率50%、発生株率13.5%でした。
- 2) 5月の気温が高いと予想されていますので、今後の増加が見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCを発生初期に株元灌注処理します。また定植ネギの場合は、定植前に育苗トレイ等に灌注処理を行います。
- 2) 灌注処理後も発生によく注意して、再発生が見られた場合は防除します。薬剤散布の際、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくびかななどの展着剤を加用します。

5. キク

(1) 白さび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 今後、天候不順が続くと発生が拡大する恐れがあり、罹病性品種では特に注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 下葉の発病葉は伝染源となりますので、直ちに取り除いて埋没又は袋詰めして処分します。
- 2) 発病前に予防散布を行います。SDHI剤のカナメフロアブル、DMI剤のラリー乳剤、またはハチハチ乳剤を使用します。薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けます。
- 3) 発生初期には、下葉の発病葉を除去してから薬剤を散布します。連続した降雨が予測される際には、1週間間隔での散布を行います。

2) ナミハダニ黄緑型

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率33%、発生株率1.0%でした。
- 2) 5月の気温は高いと予想されており、今後の増加が見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) 各種殺ダニ剤に感受性の低下した個体群が増えています。殺ダニ剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。
- 2) 作物残さや除草後の雑草をほ場周辺にそのまま廃棄すると、発生源となります。

6. 野菜類・花き類共通

(1) アブラムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：多 い（キク）
平年並（イチゴ、半促成トマト、
ハウレンソウ、ネギ）

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率と発生株率はそれぞれ、イチゴでは30%と1.4%、キクでは67%と7.3%でした。半促成トマト、ハウレンソウ、ネギでは発生を認めません。
- 2) 5月の気温は高いと予想されており、今後の増加が見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) イチゴ親株床では、ほ場周辺の雑草管理を含め防除に努めます。
- 2) ナスの夏秋栽培では、定植前の苗にモメントフロアブルのかん注処理を行います。トマト、キュウリの夏秋栽培では定植前の苗にプリロッソ粒剤オメガを株元に処理します。
- 3) ネオニコチノイド系剤の防除効果が低いワタアブラムシが確認されています。薬剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。

(2) コナジラミ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い（半促成トマト）
やや少ない（イチゴ）

予報の根拠

- 1) 4月中下旬の巡回調査では、半促成トマトでの発生ほ場率は33%、発生株率は0.3%でした。イチゴでは発生を認めません。

防除上の注意事項

- 1) イチゴ本ぼでは下葉に終齢幼虫がついており、ここから羽化した成虫が新葉に多数産卵します。発生ほ場では古葉のかき取りを行ってから、ウララDFなどを散布します。
- 2) イチゴの後作にトマトを栽培する場合は、定植前の苗にプリロッソ粒剤オメガを株元に処理します。
- 3) イチゴ親株や後作のトマトに発生が認められたら、コルト顆粒水和剤などで防除します。また、イチゴ本ぼで多発したコナジラミ類を体に付けたままイチゴ親株やトマトに持ち込まないように注意します。イチゴ本ぼの栽培終了後は、ハウスを閉め切って1週間程度蒸し込み、ハウス外への分散を防止します。
- 4) コナジラミ類は各種殺虫剤に対する感受性が低下しています。薬剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。

お問い合わせは

奈良県農業総合研究センター 環境・病害虫防除科
(奈良県病害虫防除所)

TEL. 0744-47-4481

その他関連情報は以下をご覧ください

病害虫防除所ホームページ

<https://www.pref.nara.lg.jp/n128/66263.html>